

街場の五輪論

本書は2014年2月、朝日新聞出版より刊行されたものに加筆して、朝日文庫から2016年7月に刊行。表紙カバー裏に「東京五輪招致成功から3年。アベノミクスの失敗が囁かれる中、成長戦略としての五輪開催は破綻している。新競技場建設騒動やエンブレム問題などドタバタ続き。ついには裏金疑惑まで浮上した。開催万歳の同調圧力に屈しない痛快座談会に特別鼎談を加えての文庫化」と。

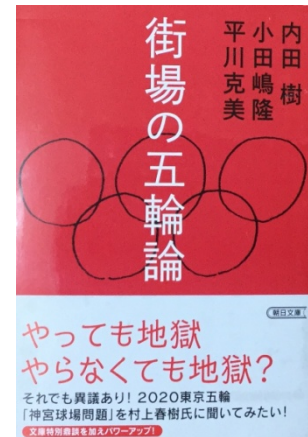
プロローグ(内田樹)から一無言の同調圧力を私は五輪招致という論件についても感じる。「そんなことを言っても、いまさら始まらない」という無力感と世論の中で孤立して無用のバッシングを浴びたくないという恐怖心が、五輪問題についての「そんな話、オレは知らんよ」というシニカルな態度を導き出しているということはないのだろうか。

鼎談に集まった3人はそのような「炭鉱のカナリヤ」の役目を引き受けることを自分の物書きとしての責務の一部だと感じている人間たちである。カナリヤが鳴いているうちは大丈夫である。だが、彼らが鳴き止んだら、そのときはみなさんはできるだけすみやかに今いる場所から逃げ出した方がいい。そのときにまだどこかに逃げる場所があるかどうかわからないけれど。

あの東京五輪招致プレゼンテーションから、「ニッポン、チャチャチャ」という熱狂、「グローバル化とカネの話」「福島への視線」など、鋭い指摘の数々を一気に読んだ。まさに「同調圧力に屈しない」きちんとした姿勢が、心地よく感じられる。

これを読んで、遠くは「名古屋五輪招致」騒動の頃を思い出した。名古屋市立の短大に就職して間もない頃であり、名古屋市の関係者らに、なぜ五輪に反対するのかと聞かれたものだ。その後も、「愛知万博」開催にメディアなどで疑問を投げかけると、陰に日向に「圧力」めいたものを感じた。無言の同調圧力は五輪招致よりも強かったと思う。メディアや審議会に登場する機会も、めっきり減ってしまった。

中部国際空港(セントレア)のような巨大公共事業でも、同じような視線、同調圧力めいたものを感じた。「便利になるのに、どうして文句を言うの」などと。そして今また「リニア中央新幹線」について、同調圧力により、ものが言いにくい状況が作られつつあるのではなかろうか。とりわけ名古屋という閉鎖的な地域社会においては。



(2016年7月25日)